

講演「朝鮮半島における流行小説の源流」（要旨、日韓文化交流基金 NEWS69 号に掲載）

2013 年 12 月 9 日

和田とも美氏（富山大学准教授）

廉価本の登場

今日は、日本では研究者以外にはあまり知られていない、1900 年代初頭の朝鮮半島の文学についてお話しします。20 世紀に入って欧米式の印刷機械が朝鮮半島にも持ち込まれ、粗末な紙に針金でとめられた廉価な冊子が出回るようになります。外国語の学習書、漢字や『小学』のような教養書、手紙の文例集や『農薬大要』のような実用書、『伯林巴里』のような外国案内等、多様な本が出版されました。

文学では、古典小説の再話、『三国志』など中国文学の抄訳、笑い話、詩歌集、新しく創作された小説などが刊行されました。新しく創作された小説には「新小説」、古典小説の再話には「古代小説」と表示されていました。「新小説」の嚆矢として有名なのが『血の涙』です。最初の新聞連載ではハングル漢字混合文で、いくつかの漢字にはハングルで訓読みが併記されていました。作者の李人植は、いろいろな点で日本の方法を朝鮮半島でも導入してみたい、という気持ちの強い人でした。ただこの訓読みのふりがなは漢字ハングル混合文には適しておらず、定着しませんでした。日本と朝鮮半島のことばはよく似ていると言われますが、こうした表記の点からも実はかなり違うものです。

二つの『血の涙』

この『血の涙』には参照されたことの明らかな日本の作品があります。村井弦斎の『血のなみだ』（1896）です。李人植の『血の涙』は、平壤で母が日清戦争の混乱の中で見失った娘を捜し歩く、という悲しい場面から始まります。一方、村井弦斎の『血のなみだ』は、父親を亡くした娘が、涙にくれている母を慰める為に花を探し回っている、という場面から始まります。父は日清戦争に参加し、その戦後処理に憤り、戦地で抗議の割腹自殺をしました。

どちらも主題は「憂国」です。国の現状に鑑みて、自分はどのように生きれば良いのか、という問いが繰り返されます。日本の『血のなみだ』は、前年の三国干渉への憤りを吐露し、外交力と軍事力を高めることを主張するもので、当時の北東アジアにおける日本の置かれた状況と直接的に関わっています。それぞれが国に奉仕する為に各地におもむいて結末となります。『血の涙』もまた、同じく国の現状を憂い、日本と満州、朝鮮が連合を組むことを主張する部分があります。ただ登場人物がその為に具体的な行動をとるわけではなく、教育によって国の力を高めることを訴えるという、穏当な結末がついています。また婚約という華やかなエピソードも付け加えられています。

それでも、当時の大韓帝国が置かれていた状況を考慮すれば、意外に強いメッセージが込められています。まず、日本は通過地点に過ぎないように描かれている点です。青年、具完書は渡米して学問を修めようと家出し、日本を通過中に玉蓮と出会います。玉蓮は具

完書に誘われ、共に渡米します。玉蓮の父もまた、国のために渡米して勉強中でした。

作者の李人植は親日的な人物と評されることが一般的ですが、この作品が発表された当時、既に朝鮮半島は日本の統監府の管理下に入り、外交権も失っていました。その状況下で、日本を単なる通過地点として描き、世界に視野を広げて行こうと呼びかける作品を発表したことは、非常に強いメッセージが込められているものと受け止める必要があります。

タクチ (탁치) 本の時代

『血の涙』の頃はまだ、表紙はおとなしいものでしたが、1910年代に入ると、「タクチ本」と呼ばれるように、華やかな色刷りの表紙が表れ始めます。「タクチ」は子どもの遊ぶメンコを意味します。

「新小説」には、国外の小説の抄訳や翻案も多く含まれる一方で、1910年代以降になると、朝鮮半島の内部に取材された物語が主流になっていきます。その筆頭格が『康明花傳』です。『康明花傳』とは、1923年に実際にあった事件をもとに、1925年から1970年にかけて何種類も出版された物語です。映画では、1924年に日本人の早川増太郎監督が製作した朝鮮映画『悲恋の曲』が、この事件を題材にしたものです。韓国人による映画は1967年に製作されています。

康明花とは実在した妓生の名前で、その来歴は、自殺当時の新聞記事によってかなり明らかにされています。父親は貧民で放蕩者、母親は名家の出身でした。没落した名家から貧家に嫁に出され、そこで生まれた娘が康明花です。母親は娘を貧家で育てるより、妓生に出すことを決意します。康明花はすぐに平壤随一の妓生となり、富豪の一人息子と恋愛関係になります。

この2人からすぐに連想されるのは朝鮮半島の古典小説『春香傳』です。『春香傳』は、繰り返しリライトされて今でも突出して知名度の高い物語です。一方の『康明花伝』は、1970年に廉価本として出版されたのを最後に、急速に忘れられました。ところが1920年代から70年にかけては、『春香傳』と同等の存在感を示すほどの流行小説でした。ハッピーエンドの『春香傳』の対極として、『康明花伝』は男女2人とも自殺という結末です。

1920年代から70年まで流行小説であり続けた『康明花傳』

最初に『康明花傳』が刊行されたのは1925年で、康明花が幽霊となって現れるところから始まります。この部分は小説化された際に付け加えられたものです。実際の事件をもとにしながら幽霊話から始まるというところが、この物語が朝鮮半島の物語の歴史をきちんと受け継いでいることを示しています。朝鮮半島の物語の根底にあるのは、ムーダン（巫堂；霊媒師）による死者をなだめる為の歌舞だと言われています。『春香傳』もまた、無念に死んだ妓生の魂をなだめる話から発生したという説があります。この二つの物語はその構造を共有しています。まず男性側は特権階級に属し、女性側は、両班と下層階級の境界線上にいる人物であるという点です。そしてこの恋愛が、男性側の家の理解を得られない

ことも同じです。

康明花は平壤随一の名妓として実家の生計を支えていました。ところが張柄天との出会いによって妓生を辞め、無収入になりました。この点でも、春香の家が、退妓である母の蓄えで暮らし、春香の良縁に将来の生活の全てをかけていることと同じです。ところが康明花には『春香傳』的結末は用意されませんでした。『春香傳』の場合、男性が生活力を手に入れた後に、春香を迎えました。

一方、康明花たちは、恋愛の情に駆り立てられるだけで何の方策ありません。その結果、結局は親の経済力にとりこまれてしまいます。もっともこれは当事者の能力の問題とばかりはいえませんが。

『春香傳』の背景には、男性の出世コースが明確だという前提がありました。李夢龍のように高級官僚の子弟であれば、科挙で良い成績をとりさえすれば、相当な権力を手に入れることができます。主席合格して暗行御使となった時点で、彼は地方長官の不正を処分し、捕らえられていた春香を救出できるほどの権力を手に入れていました。

康明花事件の1920年代初頭、植民地となった朝鮮においては、男性の出世コースは不確定化しました。四書五經重視のそれまでの学問に代わって、新学問が重視されるようになります。また学歴も必要になりますが、朝鮮半島内では高等教育機関が不足しており、多くの若者が日本等へ渡りました。異郷への留学は、それまでのように家で書物に向ってきた科挙の準備とは、全く違った行動力が必要になります。

一方、女性の置かれた状況も変わりました。春香の場合は、その血筋的条件のために、男性の出世の後ろ盾になることはできませんが、良家から正妻を迎えて一族の繁栄を維持する夢龍に異議を唱えない代わりに、当事者の意思による恋愛という、望んでいた良縁を実現させることができました。それが彼女の境遇に許された最大限の自己実現でした。



『新小説 牡丹屏』表紙 富山大学附属図書館所蔵

1920年代前後は、朝鮮半島において「自由恋愛による婚姻」が、理想として叫ばれた時代でもあります。といって妓生との恋愛から婚姻に至ることは、その理想の圏外にありました。つまり、かつて恋愛の担い手であった妓生たちが、一夫多妻制から開放されると同時に、むしろ恋愛から排除されていくことになったのです。

ある種の自由が強調されていく中で、その自由の享受を許されないグループが新たに作られて排除されて行く過程、『康明花傳』はそれを示しています。1970年代までこの物語が享受され得たのは、新しい秩序の形成過程で排除された者たちの訴えを後世に伝える、という朝鮮半島の物語の役割が、まだ生きていたことを示しています。

1920年代の後半になると、女学生が登場する物語がタクチ本に多く表れ始めます。といっても華やかさはありません。女学生間の経済格差、修学後の進路は結局は婚姻というやりきれなさ、かつて抗日運動に参加して今は将来の見通しも無い空しさ、そうした状況を乗り越えるすべの無い無力な人々の暗い表情が、淡々と描写されていきます。

タクチ本は1970年を最後に出版が途絶えました。文壇で評価される作品とはまた違った役割をひきうけていたものと思われます。時代に即応し、その感覚をとりこむというその役割は、恐らくはテレビに吸収されていったのでしょう。1990年代まではまだ、古書店などに束で捨て値で売られていました。価値を認められるようになったのは、2000年代に入ってからです。富山大学でもまとまった金額で購入しましたが、日本に流出してしまったことには批判もありました。ただ、現在では電子化してインターネット上で公開することが可能になりました。どこで所蔵するかはもうあまり問題にならないのかもしれませんが。

(了)